

# 論文の要約

論文題目 中国語のモダリティ表現の接続詞化と談話標識化に関する通時的構文文法的研究  
—日本語との対照を交えて—

氏名 朱 冰 (ZHU, Bing)

本研究は、機能主義的類型論の立場に立ち、通時的構文文法のアプローチから、日本語との対照を交えて、中国語のモダリティ表現の接続詞化と談話標識化を体系的に考察するものである。

序論である第 1 章では、まず本研究の背景・目的を紹介し、これまでのモダリティの文法化研究において、(i) 典型的なモーダルの意味以外の機能・用法への拡張、(ii) 中国語のような東アジアの言語におけるモダリティ研究の言語類型論への貢献、という 2 つの課題をさらに開拓する必要があることを指摘した。その後、言語類型論の研究と中国語の研究に分けて、モーダルからポストモーダルへの通時的発達に関する代表的な先行研究を概観した。その上で、本研究はモダリティ表現の接続詞化と談話標識化を軸に、ポストモーダル機能の発達を観察するものであることを提示し、具体的な内容として、法助動詞の接続詞化、禁止表現の接続詞化、法助動詞(節)の談話標識化という 3 つの拡張パターンを取り上げるとし、本研究の研究方法(共時的・通時的コーパス調査)及び使用するコーパスについても紹介した。

第 2 章では、本研究が援用する理論的枠組みを紹介した。本研究は、通時的構文文法のアプローチから具体的な拡張例を分析し、基本的に Traugott and Trousdale (2013) が提案した「構文化」の枠組みを援用している。構文文法の基本的な考え方、及びこれまでの文法化研究における 2 つの異なるアプローチを紹介した上で、構文化理論の主な主張を概観した。このモデルでは、構文変化と構文化という 2 種類の変化を区別している。構文変化は、ある構文のいずれかの側面に影響を与える変化であり、構文ネットワークに新しい節点の形成を伴わない。構文化では、一連の構文変化を経て、新しい形式と新しい意味のペアリングが成立する際、構文ネットワークに新しい節点で作られる。構文化の方向性については、これまでの文法化研究が主張してきた縮小現象が続くという一方向性の代わりに、構文または構文ネットワークの生産性・スキーマ性・合成性という部分的な特徴に見られる方向性がより重要だと指摘されている。

また、構文化の主なメカニズムは、再分析（新分析）と類推（類推化）であり、文脈も重要な役割を果たしている。

第3章～第5章は、統一的な構成で展開し、それぞれ1つの具体的なケーススタディを通じて、対応する拡張パターンを考察した。また、日本語における類似した現象にも言及した。

まず第3章では、束縛的法助動詞“必須”（「なければならない」）における必要条件節マーカ機能の拡張を例として、法助動詞の接続詞化を観察した。他の拡張例として、法助動詞“要”（「なければならない」）と“可能”（「かもしれない」）における節連結機能の獲得についても言及した。中国語の法助動詞には、主に「束縛的必然性>必要条件」、「認識的必然性>条件」、「認識的可能性>譲歩」という3つの節連結機能の拡張経路が観察されている。この中で、「認識的必然性>条件」と「認識的可能性>譲歩」の拡張経路は、通言語的に観察されているものである。一方、“必須”を代表例とする「束縛的必然性>必要条件」という経路は、類型論上、必ずしも普遍的に存在しているパターンではない。これは、モダリティ文法化の類型論的研究に貢献できる重要なデータであると言える。また、“必須”における機能拡張のメカニズムを詳しく分析した結果、再分析というよりも、類推がより重要な役割を果たしていたことが分かった。日本語の「かもしれない」にも「認識的可能性>譲歩」のような機能拡張が見られる。

次に第4章では、禁止（否定の命令）表現から接続詞への拡張の一例として、“别说”（「言うまでもなく」や「まして～なんて」に類似）を代表とする禁止マーカと発話動詞の組み合わせに由来した尺度添加を表す等位接続詞の成立を考察した。他の拡張例について、“别看”（「～にもかかわらず」），“别提”（「言うまでもなく」や「まして～なんて」に類似），“别管”（「～にかかわらず」「～を問わず」）のような禁止マーカと他の動詞との組み合わせに由来した接続詞も概観した。中国語では、「禁止>尺度添加」、「禁止>譲歩」「禁止>譲歩条件」といった拡張経路が観察された。（肯定の）命令表現における節連結機能の拡張は、日本語（例：「にせよ」「にしろ」）を含めて、言語間で普遍的に見られるが、禁止表現から等位接続や従位接続をマークする接続詞への拡張は、類型論上、必ずしも顕著な現象ではない。本章で取り上げた中国語の拡張現象は、モダリティ、特に禁止表現の文法化に関する類型論研究に重要なデータを提供していると言える。また、禁止マーカと発話動詞の組み合わせに由来したSACの成立については、[[禁止マーカ+発話動詞]<sub>等位接続</sub> ↔ [尺度添加]]という構文スキーマに基づく拡散変化が生じたと考えられ、文法的变化における類推の重要な役割が改めて確認された。

最後に第5章では、法助動詞（節）の談話標識化について、“应该说”を例として、その成立過程と談

話機能を考察した。“应该说”は束縛的法助動詞“应该”（「べきだ」）と発話動詞“说”（「言う」）からなる主節の一部から、文副詞的な要素に転成したものである。“应该说”は実際の談話において、談話標識として多様な談話機能を果たしている。“应该说”のほか、“可以说”、“要知道”といった法助動詞（節）に由来した類似したパターンの表現が複数存在していることから、[[法助動詞+α] ↔ [スタンスマーキング]] という共通のスキーマが存在している可能性を指摘した。言語類型論の観点から言えば、法助動詞と他の要素との組み合わせが文副詞的な要素や挿入句に転成することは、必ずしも中国語独特の現象ではない。日本語でも、慣習化の度合いは低いかもしれないが、類似した現象（例：「～とすべきだ」「～と言ってもいい」）が観察できる。しかしながら、中国語は多様な結合パターンを提供しているのみならず、一部の表現は慣習化した談話標識となり、多様な談話機能を果たせるようになっている。言い換えれば、中国語の法助動詞は、ポストモーダルの段階において、積極的に談話領域へ機能拡張していると考えられる。

本研究は、これまでのモダリティの文法化に関する言語類型論の研究では十分に重要視されてこなかったポストモーダル機能の発達に焦点を当て、接続詞と談話標識への拡張変化に研究対象を絞り、中国語のデータに基づいて体系的な考察を行った。Bybee et al. (1994) や van der Auwera and Plungian (1998) といった先行研究が指摘した拡張経路以外に、「束縛的必然性>必要条件」「禁止>尺度添加/譲歩/譲歩条件」「法助動詞（節）>スタンスマーカー」といったこれまでの研究では報告されていなかった拡張経路を提供し、ポストモーダルの発達における多様性と複雑性を提示した。言い換えれば、中国語のモダリティ表現は、力動的・束縛的・認識的意味といった典型的なモーダルの意味のほか、多種多様な機能を持っており、テキスト・談話領域のような多様な機能領域へ拡張していた。よって、本研究は、モダリティと隣接する文法機能との連続性に関する通言語的な普遍性と多様性を観察するために、有益な試みを行ったと言える。それと同時に、本研究を通して、多様な機能を果たしている中国語のモダリティ表現は、モダリティの文法化に関する言語類型論の研究に重要なデータを提供し、言語類型論研究における中国語の重要な役割が示された。本研究をきっかけに中国語のデータを用いて、モダリティの類型論と文法化に対するさらなる理論的探索が期待される。

また、本研究で取り上げられたモダリティ表現の接続詞化と談話標識化という現象は、Narrog (2012) が提案した意味変化における普遍的な方向性にうまく適合していると考えられる。つまり、モダリティにおける意味変化は、モダリティの文法化の後期段階において基本的に談話・テキスト自体にリンクする

意味機能の発達方向に進んでいる。特に、第 4 章で扱った中国語の禁止表現や日本語の命令表現といった間主観性が顕著に表れている表現から接続詞への拡張変化は、「非主観的意味>主観的意味>間主観的意味」という（間）主観化の一方向性仮説 (Traugott 1995, 2003, 2010) によってうまく説明できないことから、テキスト機能の発達を独立した拡張方向であると見なす Narrog (2012) の妥当性が改めて確認された。

さらに、日本語との対照を通じて、ポストモーダルへの拡張は、当該言語のモダリティ表現の固有性質に大きく左右されるのではないかと推測できる。例えば、中国語の法助動詞と比べ、迂言的な形式が多い日本語の法助動詞は、文法化の度合いが相対的に低いと考えられる。このようなモダリティ形式がさらにポストモーダルへ拡張することは、比較的制限されていると予想できる。

本研究では、具体的な拡張例を分析する際、構文化 (Traugott and Trousdale 2013) を代表とする通時的構文文法の枠組みを援用した。各章の考察結果から分かるように、構文的アプローチから、構文スキーマと構文ネットワークを通じて、異なる構文の関係、及び成立プロセスをより明快に捉えることができた。拡張変化のメカニズムに対する分析から、異なる構文間の類似性に基づく類推は、新しい構文の成立において重要な役割を果たしていることを確かめることができた。また、文脈上の連続性・保持は、複数のケースから観察され、言語変化の漸進性が顕著に表れている。言語変化を推し進める話し手は、品詞・カテゴリー上の変化に比べ、具体的な用法、つまり類似した生起環境の情報をより知覚・記憶しやすいと考えられる (De Smet 2012)。本研究の結果は、用法基盤モデルの「言語は類似性に基づいた動的で組織化されたシステム (dynamic and organized system) である」という考え方 (例: Langacker 2000; Bybee 2010) も支持するものである。